

## ミケランジェロの初期作品における「多視点性」

### —ルネサンス期彫刻の視点の捉え方との関わりから—

新倉慎右(慶應義塾大学アート・センター)

観者が彫刻作品をどこから見るかという視点の問題は、彫刻作品は見る位置によって輪郭を変えるため、極めて本質的な問題である。この問題に自覚的に取り組んだルネサンス期においては、視線を遮るものが少ない場所に設置されることが増えたため、多方向からの視線に対応した造形を有する彫像を発展させていった。

ヴァザーリが『美術家列伝』で述べているように、ルネサンス当時の一般的な理解では、「人体を正確に再現した丸彫りの彫像」が「多視点性を有する彫像」であった。ボルギーニやボッキにおいても問題にされているのは解剖学的知識に基づく人体の再現性であり、彫像の造形などの構成要素ではない。一方でラーションが指摘しているように、ヒルデブラントらがルネサンス彫刻に関して認識する「多視点性」は、より近代的な価値観を反映している。それは解剖学的知識と関係なく、輪郭線や表面の効果といった造形や構成の価値判断を通して成立するものである。したがって、現在用いられている「多視点性」の概念は、ルネサンス当時のそれとの間にはずれが存在している。

しかし、これまでルネサンス彫刻における「多視点性」は、この齟齬を考慮せず議論されてきた。先行研究では、やがてマニエリスムで大成する近代的な「多視点性」を確立したのはミケランジェロであると考えられている。近年ではローゼンベルクやエヒンガー＝マウラハも《サムソンとペリシテ人》における鑑賞者の移動を誘導する視点構成を指摘している。発表者は以前、近代性の面から、こうした造形が上述のように人体の再現性のみを問題とするルネサンス当時において、いかに画期的であったかということ論じた。

一方で、ミケランジェロ作品の視点が、近代ではなく、ルネサンスにおける彫像の視点理解の側からどのように認識されるかについては詳しく考察されてこなかった。しかしながら、ミケランジェロ彫刻が有する、鑑賞者の視点の取り扱いにおける先進性を正確に彫刻史に位置付けるには、ニッチに設置される彫像にも背面の造形を要求した16世紀的な認識とのより詳細な比較検討が必要である。これにより、彼が鑑賞者の視点への意識を制作の根幹に据えていたことも、鮮明になる。

本発表ではこのことを踏まえ、以下の手順で、すでに視点の扱いが特異であるミケランジェロの初期作品を考察する。まず《バックス》などにおける人体の再現性を確認し、次に同時代の他作家による作品と比較しながら、その造形が当時の彫像における視点の概念に照らして、どのように認識されるかを考察する。さらに批評家の記述を勘案することで理念と実践の差異だけでなく、ミケランジェロが当時の一般的な視点概念のどこに依拠したかを具体的に示す。これらの考察により、彼の作品の視点と当時の理論との関わりを跡付けるとともに、彼の他作品に関して同様の議論をする際の基礎を構築することができるだろう。